70 周年「TSUNAGU IB Project」
●団紹介プログラム・記念誌用原稿の作り方

●記念誌の構成

記念誌の「団紹介」は、次の 6 つで構成されます。（次ページレイアウト参照）

①団名
②団情報（発団日、現在の団・隊構成と人数）
③団紹介のタイトル
④団紹介文
⑤写真
⑥写真の説明（キャプション）

です。

ページ数は、出来上がりで 2 ページ、4 ページ、6 ページのいずれかを選んでください（偶数ページ）。できるだけ、文字数（行数）いっぱいで原稿を作ってください。

では、それぞれについて説明します。

①団名

現在の登録されている団名です。

発団の時と団名が変わっている場合は、④の本文の中で触れてください。

②団情報

- 発団日。これは、戦後、最初に「団（または隊）」として日本連盟に登録した日です。

  戦前に発隊している場合は、④の本文の中で触れてください。
- 現在の団・隊構成と人数。これは、令和 3 年度 4 月 1 日付時点で記入してください。

③団紹介のタイトル

これからの団の目標や方向性、団特徴など「1 行= 24 文字」以内にまとめて表してください。

どうしても、それに収まらないときは「2 行= 48 文字」を最大とします。

④団紹介の文

- 出来上がりページ数により、**文字数**が変わります。実際には文字数より「行数」の方が重要になります。ですので下表の行数×列数に収まるよう文字原稿を作ってください。

  1 行は 18 文字となります。英数文字は半角で。

2 ページ	18 文字× **32 行×５列**	最大 160 行
4 ページ	18 文字× **32 行×４列** 18 文字× **40 行×５列**	最大 328 行
6 ページ	18 文字× **32 行×４列** 18 文字× **40 行×９列**	最大 488 行

（注意）文頭を除く大見出しの前には 2 行、大見出しと本文の間、及び中見出しと本文の間には 1 行分の空白行が入りますので、その分を総行数から引いてください。

- 見出しと見出しの文字数

文には、読みやすいように、1 つの括りごとに「見出し」を付けます。見出しとは、「あるまとまった文章の内容をひと目でわかるようにしたもの」です。タイトルが文章全体を表しているのに対し、見出しは一部分を表しています。見出しがあることによって、読み手が全体の構成を把握しやすくなります。

大見出し	11 文字以内	最大 2 行で 22 字
中見出し 1.2.	14 文字以内	最大 2 行で 28 字
小見出し①②	16 文字以内	最大 2 行で 32 字

⑤写真

- 団紹介ページに写真を載せることができます。ただ、全体のレイアウトを統一したいので、選んだページ構成ごとに掲載できる写真の数を指定します。指定された枚数を用意してください。
- **掲載する枚数**

2 ページ	小 5 枚	計 5 枚
4 ページ	大 1 枚、小 11 枚	計 12 枚
6 ページ	大 1 枚、小 16 枚	計 17 枚

- **写真（画像）のデータについて**

  写真は、次の形式の画像データで提出ください。

形式	JPEG、PNG、PSD	CMYK
サイズ	大	1780×1185 pixel　より大きく
	小	870×580 pixel　より大きく

※横長の写真としてください。

- **写真は白黒でもカラーでもかまいません。**

※画像ファイルのファイル名は、特に指定しませんが、別紙「記念誌原稿提出票」には、そのファイル名を明記してください。

※また、写真は、見本ページのような順番で掲載します。別紙「記念誌原稿提出票」には、その順番（番号順）に記入ください。

⑥キャプション

- キャプションは、写真に写っている内容の説明です。

  次ページにあるように、番号を振って写真と照らし合わせて掲載します。
- キャプションは 1 行とします。15 文字以内にまとめてください。これも「記念誌原稿提出票」に対応するように記入ください。

●原稿の提出

①②③⑤⑥については、「記念誌原稿提出票」に入力して。

④については、専用の原稿用紙に入力して。

⑤の写真データは、指定されたものを

記念誌原稿提出票、文字原稿、写真（画像）データを一緒に。

下記あてメールで送ってください。

◆提出期限　　**2021 年 7 月 31 日（土）**

◆提出先（メールアドレス）**70my@scout-ib.net**

○○○○○第１団

タイトル

ボーイスカウト運動のねらうものは何か

大見出し

ボーイスカウトとは

中見出し

1. ボーイスカウトについて

最近の青少年の非行については各方面とも頭を悩やませている大きな問題である。水戸市や日立市では青少年センターを設けて健全育成に乗り出しており、県委員会では中学生に一泊二日程度の宿泊による生活指導を計画しており、又今日の新聞を見ると、7 月 27 日の県会総務委員会でも青少年の対策の一つとして「青少年の村建設地を筑波山系一帯の国有林に決める」と報告している。

ボーイスカウトでは発足当初より訓育の場を野外に求める場合が多い。以下記述する内容はスカウト運動に従事している方々には釈迦に説教のきらいもありますが、十五年誌をお読みの方の中にはボーイスカウトについて認識をお持ちの方々ばかりではないように思われますので、今後スカウト運動に協力いただく上からも一応知っていただくことがあながち無駄ではないと思い、書くことにいたしました。スカウト関係者は自己反省の資料に一読いただければ幸いに存じます。

小見出し

①目的

この運動の創始者ベーデン - パウエル卿は此の運動の目的についてこういっております。家庭にあってはよい家庭人であり、職域にあってはよい職域人であり、

本文

国にあってはよい国民であり、社会にあってはよい社会人である。ここまでは今の学校教育でもできましょう。だがボーイスカウトではその上に、国際社会においてはよい国際人であり、世界的にはよい世界人であり、特に国際的、世界的公民ということを強調しております。1924 年デンマークの第 3 回国際会議の時にユニヴァーサル的である宣言決議がなされています。

スカウトの心のおきどころと方向を示した 12 のおきての流れをみましても此の運動の目的とする所がどこにあるのか判然することと思う。

②おきて

1、スカウトは誠実である。2、スカウトは忠節をつくす。3、スカウトは人の力になる。4、スカウトは友誼に厚い。5、スカウトは礼儀正しい。6、スカウトは親切である。7、スカウトは従順である。8、スカウトは快活である。9、スカウトは質素である。10、スカウトは勇敢である。11、スカウトは純潔である。12、スカウトはつつしみ深い。

要するに 12 の条件をそなえ持ったところの公民ということになります。

③方法

第 1、自発活動の尊重。ボーイスカウトは団体訓練の代表のように考えられているが、本すじは組織体訓練をいたしている団体である。両者は同じように見えるが内容的には大いに異なっています。団体訓練では個人の人格が滅却され、独裁者の命令や号令のままに動く性格の団体、所謂他律的で団体が解散した後に残るものは自制力や自主性のない判断力に乏しい人間だけとなる。戦後のわが国民に見られた所である。

第 2、個別訓練の重視。それぞれの持つ特性を充分生かす即ち個々適応の教育を重視する。学校教育のような多人数を一人の教師のする方法はとらない。

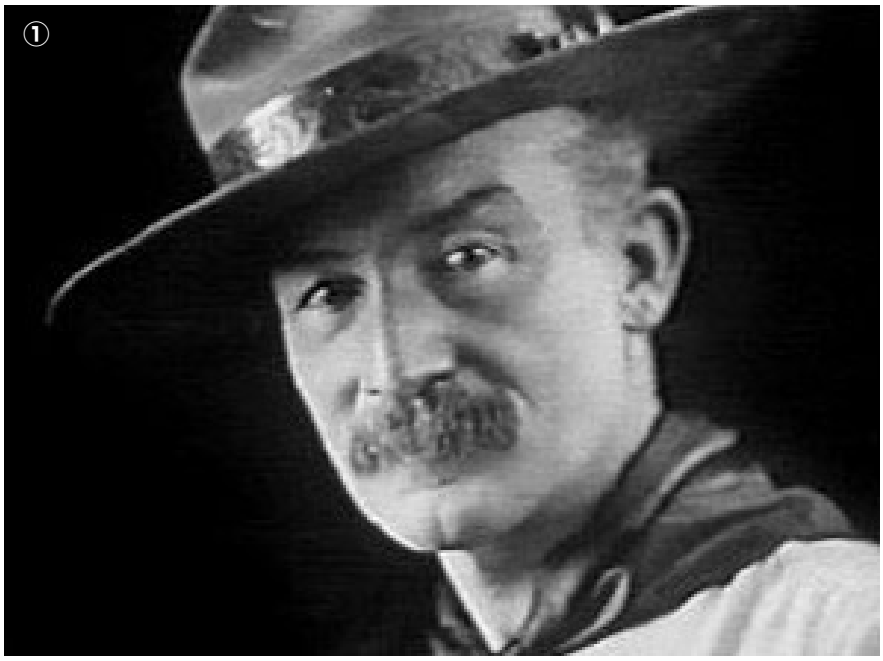
第 3、班制教育の重視。個々の指導をするため班別の制度を採用していることは、ボーイスカウト教育法の特色である。千差万別の機能が個々の使命を忠実に実行することにより組織体が成立する人体や天体のように。従って班員個々の傍観は許されない。班生活と班活動とは少年個々が公民として協動社会にいかにあるべきかを実修するチャンスである。団体訓練にも班はあるが、便宜上のグループであって機能を持っていない。只班長の号令のまま動くだけにすぎない。了度機関車に引かれる貨車のようなものである。

第 4、進歩制度の重視。自発活動を持続発展させる巧妙な方策である。進級制と技能章制があって、進級制は仮入隊から初級、2 級、1 級と進み、更に菊スカウト、隼スカウト、富士スカウトの課程がある。技能章制は選択課目であって、木工、竹細工、水泳、消防、野営、炊事のような技術中心のものや、電気、無

レイアウト見本

団のプロフィール
発　団　　昭和 45 年（1970 年）〇月〇日
団構成　　BVS、CS、BS、VS、RS
　　スカウト：〇名　指導者：〇名　団委員：〇名

① 創始者ベーデン - パウエル卿〇〇〇
② 15 文字以内
③
④
⑤
⑥
⑦















線通信のような科学技術的なもの、天文、測量、絵画、音楽、写真、園芸等々生活技術にわたるものについて一定の課題が前もって出してあり、自分で選択し勉強してテストを受け、パスすればそれぞれの技能章がもらえる仕組みになっている。創始者の意図は技能を働かせることによって他の人々を助け、自己の特技を生かして他に奉仕する能力をもった公民の養成をねらったものである。

第 5、ゲームの重視。こと更外国語を用いたのには意味がある。ゲームという言葉には「狩」とか［宝物」という意味もあるので、ゲームは単なるあそびではない。その裏には計画や、ねらいを持っている。そして何かの収穫を期待しているわけである。指導者は子供の遊戯本能と競走本能を見のがさない。スカウト訓練とその生活指導のすべてを、巧みにゲーム化したわけである。「行なうことによって学ぶ」ということばは戦後日本の教育でもさかんに叫ばれましたが。50 年も前に創始者はこの言葉を記し、スカウト教育法を世に出したのである。ルールに従って反則しないという公民訓練の重要な面はゲームによって大いに養われた。

第 6、野外生活の重視。此の教育では野外を教育の場とすることが多い。教育は本人の好む場でというわけで大自然の山野に本性を充分発揮させることによって、よき教育が生まれるものだ。ス

カウト訓練の基本である観察力や推理力を養うのに最も適している。野外生活から受ける効果は数限りなくある。従って野営は最もスカウトにとって重大な訓練の一っとなっている。

創始者であるベーデン - パウエル卿はスカウト教育では次の 4 つのことを常に頭の中に入れておかねばならないといっている。その一つは人格 (あるいは性格)、その二つは健康。その三つは手技 (または技術)、その四つは奉仕であります。

指導者が少年を指導するに当って常に頭におくことは人格の形成に役立つかどうか、健康の増進になるかどうか、技能の習熟に役立つかどうか、他の人々へ奉仕のためにするのかどうかである。

2. 団について

単にボーイスカウトと一般は広義の意味でよんでいますが、くわしくは 4 つの部門があるわけです。

①**年少スカウト**：カブスカウトで 3 年から 5 年の半ば頃の年令の少年を対象としたもの。

②**少年スカウト**：ボーイスカウト。小学校 5 年 3 学期以上中学卒業または 15 才までの少年を対象としたもの

③**年長スカウト**：シニアスカウト。15 才以上または中学校卒業生で 19 才未満の少年を対象としたもの。又年長スカウトの中にさらにわけで、

シニアスカウト‥‥　一般
シースカウト‥‥　海洋部門
エアスカウト‥‥　航空部門

④**青年スカウト**：ローバースカウト。18 才以上の青年を対象とするもの。大体 24 才位までとしています。

充実した団は年少隊、少年隊、年長隊、青年隊、が全部あることが理想だが、現在の段階では少年隊だけとか、年少隊と少年隊とか色々の形で登録されているようです。今の規約では少年隊 1 個隊でもこれを団とみることになっています。年少隊でも同様である。

団を組織するのには母体となる育成団体を作ることが第 1 段階である。(1) スカウトになろうとする父兄に集まってもらう方法、(2) は既にある何かの団体、会社などがその事業の 1 つとして作る方法。最近ロータリーやライオンズクラブが後援団体で成立した団がかなり出来てきた。

⑤育成会役目

施設や用具をととのえたり、教育訓練の経費を作って十分に活動出来るようにすること。

⑥団委員会

育成会の常任幹事のようなもので、直接団の運営にあたる。日本連盟に登録をすることになっている。1 個隊の場合は 3 名以上。2 個隊以上の団の場合は、それぞれの隊の意向が公平に反映するよう 5 名以上になるようにその人選を考置しなければなりません。

草わけの断章

1. 佐野先生をたずねて

たしか昭和 22 年と記憶している。当時の米軍政部の青少年社会教育担当官が、私にボーイスカウト運動をすすめた。その頃私は県青年団体に関係していたので、多分県の社会教育課あたりから通じたものと思う。戦前東京で少年団のリーダーの経験をもっていた私は、かねがね戦後の荒廃した世相の中に野放しにされている少年たちに、何かを与えなければならないと考えていた矢先きだったので、さっそく当局から佐野先生の紹介をうけ、岩瀬町に先生をたずねた。

先生は初対面の私に、ボーイスカウトについて、懇切に説明してくださり、ぜひ結成するようにと強く希望された。私は佐野先生の話にすっかり感銘し、不躾にも一泊してしまった。先生の御都合も考えず、かなり夜更けまでお話しを伺ったような気がする。

戦前の BS の思い出

1. 私の BS へのあこがれ

私が小学校 5 年生の頃だったと思う。当時全国的に各地に少年団が作られ、私の学校 (笠間小学校) でも学校として少年赤十字国（JRC) が結成された。

その時赤十字のついた丸いバッチを胸につけて発団式を挙げたことが思い出されるが、その式の情景はすっかり忘れてしまった。その式の後半袖半ズボンにネッカチーフをつけた少年団服の方が 3 人と、何人かの青年会の方が来られた。はじめにお話をされたのは鼻の高い上品な少年団の服装をした方であった。この方が三島先生であったのだ。続いて同じ服装をした方がロープの使い方や、ネッカチーフの使い方を実演された。私はただ目をみはって興味深く見学した。この方は後になって知ったのだが本庄氏であった。更に三島先生に同行された青年会員の中に佐野先生がおられたことも後に知ったが、その時の顔は覚えていない。

この時から私は少年団に入りたいというあこがれをもつようになった。

またこの頃或製薬会社の宣伝の映画

会があった。その映画の中に、或不良仲間に誘惑されそうになった若い女性を、少年団の服装をした青年が救い出す場面があったが、その青年のきびきびした動作に私は大きな感激をもち、少年団についてのあこがれがいっそう強くなった。

この映画の中の青年は三島先生であったように記憶している。

私は少年赤十字団員として、廃品回収や神社の清掃奉仕などをして、小学校の高等科を卒業したが、少年時代にスカウト運動に参加する機会がなかった。

2. スカウト運動に参加するあしがかり

私が師範学校を卒業して或小学校に勤務して３年目の夏休みに、県主催の校外生活指導講習会に参加した。場所は大貫海岸で、すべてテント生活であった。私にははじめてのテント生活であったので、興味深し、毎日であった。その時本部には、田中確一、川崎芳之介、関宗二、佐野珖治、打越 直の諸先生がおられて、私たちのお世話やご指導に当たられていた。各先生共皆若々しいお顔であったことは申すまでもない。この講習でテントの張り方、飯食炊事のし方、ハイキング、キャンプファイヤーのし方など実修し、少年団の班制などの講義により、一応少年団指導者としての知識と技術の初歩的なものを身につけることができた。この講習会に参加してはじめて佐野、打越両先生とお近づきする機会を得、今日まで 30 余年おつきあいしている。

次の年の夏休みに佐野先生が私の家に来られ、実修所に入所するよう奨められた。一応不安な気持もあったが入所することを約束してお別れした。私は笠間稲荷の渡部氏と同行することになった。場所は山中野営場で所長は中野忠八先生、隊長は戸田和夫先生で、実修内容は甲種少年部の教程であった。中野先生の厳格で率先垂範のご指導にはただ頭がさがり、実修生一同互に励まし合い実践第一の日課の連続であった。今も目に浮かんでくるのは、雨の中の架橋とキャンプサイトの開拓、雨風の中の１泊ハイクと閉所式等々、この７日間の実修所生活でスカウト道の厳しさと不撓不屈の意気を心身をとおして感得したのであった。次の年の春笠間小学校に転任し塙瑞比古先生の笠間少年団に加入させていただく機会を得た。

3、少年団と共に

当時の笠間少年団は団長が塙瑞比古先生、隊長は檜山武男先生であったが、私は少年団の実際指導について尊いご指導を受けたことについて今でも感謝申しあげている。笠間での５年間の少年団生活はほんとうに楽しいものであったし、尊い体験でもあった。

この間に地方実修所を続けて２回笠間の佐白山で聞いた。その第１回の時には時の総長竹下勇先生、第２回の時には理事長二荒芳徳先生をお迎えしたのであった。この２回の実修所に佐野、打越、中田の諸先生と共に所員の一員として奉仕できたことは深い感銘であった。この２回の実修所開設によって、県内に数多くの同志が生れ今後の発展を期していたのであった。この２回の実修所の生みの親は佐野、塙の両先生であることを忘れてはならないと思う。本県の再建スカウトの草わけもこの笠間の第１回指導者講習会が口火を切ったか











⑧ 15 文字以内
⑨
⑩
⑪
⑫

らである。

4、戦時体制下の少年団

昭和 14 年 8 月 17 日から 21 日まで興亜青少年訓練大会が東京井の頭公園で開かれたが、これが戦前最後の BS の大会であった。この大会には竹下総長、二荒、三島の両先生もお元気で参加された。本県では笠間、岩瀬、土浦の 3 団が参加し、きびしさのある緊張の中で大会の日程をおくった。この大会には北白川宮殿下がご臨席になったが、翌年殿下は満州で戦死されたのであった。

県大会も大洗、大貫、水戸水府グランドで聞かれ、各国も防空演習等がスカウト訓練の中に取入れられるようになり、出征兵士の見送りにも参加するようになった。

昭和 16 年に少年団は解散し、大日本青少年団に統合されてしまった。

戦前の土浦少年団

1. 土浦少年団の発足

わが国で少年団運動が起ったはじまりは相当早いものと思われるが、土浦では大正 13 年 6 月 3 日であった。当時第 1 次世界大戦後の国民の気風がゆるみ、関東大震災そして大正天皇より「国民精神作興に関する詔書」が下された時代で、時の小学校長福田謹先生が、この趣旨を少年の心に植えつけるため、土浦少年団を発足させたのであった。はじめは年団の性格を赤十字少年団に合せようと考えられたが、研究の結果、独自の少年団設立にふみきったので、小学校 5 年以上 340 余名をもって 7 つの支部団に分け、さらに 1 支部の中をいくつかの班に分け、支部長、副支部長、班長、副班長によって運営させたのであった。この土浦少年団は発回以来、校外生活の善導に全力をそそぎ、その影響するところも大きかったが、今から見れば校外児童会の域を脱せず、特に大多数のため少年団としての訓練が出来なかったので、少年団活動への促進と脱皮が叫ばれてきたのであった。

2. ボーイスカウト茨城連盟に加入

かくして昭和 3 年にいたって、従来の団組織の欠陥と訓練実施上の難問題を解決すべく、団員を最高学年の高等科 2 年生にしぼり、希望者 40 名をもって訓練上の徹底と向上をはかり、あわせて校外生活の補導を目標とした。昭和 5 年頃になると少年団日本連盟の提唱する運動方針が次第に広まってきて、土浦少年団もその趣旨をとりあげ、野外訓練なども次第にとり入れてきたのであったが、なお団経費の不足と指導者の少数が原因して、ややもすると交通指導などを中心とする社会奉仕的少年団の域を脱することが困難であった。

昭和 6 年 4 月、少年団茨城連盟に加入するとともに、いよいよ連盟少年団としての教育法も積極的にとり入れやがて日本連盟に加入することを目標として、幾多の悪条件を克服しながら、困難をしのいで訓練に努力した。

特に当時の指導者であった酒井利雄先生は、単身団員をひきつれて、昭和 7 年 8 年の両年、県連盟主催の合同キャンプ訓練に参加させ、団員の素質向上に涙ぐましい努力をかさねられたのであった。

3. 大日本少年団連盟に加入

昭和 9 年、校長赤塚庄三郎先生の卓見と英断により、すべてを連盟少年団提唱の教育法に準拠して運営することとなり、新たにわれわれ 5 名 (遠藤峰雄、永井俊雄、吉田明一、岡田良典、長坂和夫) が指導者に任命されたのであった。われわれは早速東京市内の優良少年団を訪問し、幾多の示唆をうけて帰り、ここで少年団規約の大改正を行ない、団員も小学校 5 年生以上の希望男子をあてて選抜加入させ、諸準備も完了したので 7 月に入団式を行ない、直ちに指導訓練に入ったのであった。

当初の団員は 30 余名であったが各学年よりの選抜のため訓練の徹底と効果は大へん見るべきものがあった。

指導者も県主催の校外生活指導者講習会に出席するとともに健児たちも大洗海岸での合同野営訓練に毎年参加し、昭和 11 年よりは霞ヶ浦の浮島で団独自のキャンプ訓諫を実施して、その実績も他の少年団と比較して遜色なく、いよいよ昭和 11 年 10 月 20 日、大日本少年団連盟加入が許可されて、登録番号第 1471 号の連盟少年団として名実ともに土浦少年団が登場してきたのであった。

4. 土浦少年団の組織と活動

少年団の規約は 20 条からなり、その中の宣誓 3 項目、おきて 10 項目、標語「そなえよつねに」の少年団精神が中心となって、活動の計画が立られているが、これは第 3 条目的の「少年ニ堅実ナル国民思想ヲ扶植シアワセテ体育ノ充実練磨ヲハカリ、他日国家ノ柱石トシ中堅タラシムルニアリ」に要約されている。

団員は尋常 5 年より高等 2 年までの児童が少年隊として、尋常 4 年生を年少隊員、高等科卒業生を「はやぶさ隊員」として、これらを混合して 1 班 6 ～ 8 名で編成した。班の名もある年度は、フクロウ班、シシ班など動物名がつけられ、別の年には、楠木班、新田班など歴史上の人物名を班名としたこともあった。活動の基礎母体としての班制度の他に、進級制度と特技制度が

とり上げられる。進級は年少組、少年組ともに３級、２級、１級の階級があり、進級試験も考えれたが、大体は一定の訓練が行なわれた年度末に進級させたことが多かった。マッチ３本以内で火をつけることが試験項目の一つであったが、なかなかたきつけに燃えつかず弱ったこともあった健児もあった。特技章は、音楽、結索、自転車のり、モールス、手旗信号など 50 種類ぐらいあり、その規準に達するものには申請によって特技章が授与された。少年団教育の特色は今も同じである。なすことによって学ぶこと第１主義であり、室内教育も講話はつとめて少なくして、唱歌、遊戯などが講話の間に入ってきた。野外訓練としては、キャンプの外には追跡ハイキング、伝令法、自然観察、水泳指導、救急法など行ったが、やはり、キャンピング、キャンプファイヤーが一番印象にのこる楽しさであった。だんだん戦時色がこくなるにつれて、防毒マスクのかぶり方、避難訓練などがとりあげられたが、止むを得ぬ訓練であった。

連盟加入後の少年団も昭和 14 年頃から次第に、国防態勢の中での少年団となり、次第に防空訓練、交通避難訓練が重視されるとともに、いままでの少数精鋭主義の少年団が再び学校少年団におきかえられようとして来たことは、いづこも同じであると思うが、土浦少年団も昭和 15 年を境にして、ついて連盟少年団は、戦後の少年団再建まで、その姿がかくれてしまったのであり、やむをえないことであった。ここに戦前の少年団を追想しつつ現在の連盟少年団の永遠の発展を祈る次第である。

西茨城１団（岩瀬）の今昔

筆者が栃木県から岩瀬佼に転任したのは昭和６年の６月である。時の学務課長武島一義氏、社会教育課長田中確一氏、笠間稲荷神社宮司塙瑞比氏等に知遇を得たのはその頃からである。周年夏、筑波山に三島先生を所長とする実修所が開設され、所員となった思い出はなつかしい。その実修所には社教主事の坂倉恒雄氏、打越直氏、関宗二氏、山田武夫氏、今泉嘉広氏、江幡邦之助氏、後藤文氏等と共に塙瑞比古氏も入所されており、数々のエピソードがあるが紙面の都合で割愛する。

転任と同時に岩瀬に少年団を結成することは出来なかった。持って生れた消極性、慎重性からかも知れないが新米の若輩には、中々着手出来なかった。幸い笠間の塙瑞比古氏が筑波実修所を出られてから、すっかり少年団が好きになってしまったので、同氏の結成した笠間少年団を暫らく、お手伝いさせて頂くことにした。塙氏は町内随一の名望家、塙嘉一郎氏の長男で当時は三十前の御曹司であったように思う。私は塙瑞比古氏と肝胆相照す仲となり、笠間少年団のテントをお借りして岩瀬の子供達とキャンプをしたりしたものだった。

このことがいつか父兄の耳に入り、岩瀬少年団結成のきざしが見え初めたのである。今も岩瀬ボーイスカウトの育成会員である小森量平氏、それに故人となられた須田元一氏等の絶大な協力で、昭和 11 年に結成を見たのである。遂いこの間まで阿見の教育長をしていた丹国氏はその時の岩瀬小の校長あり、横須賀篤氏は教頭であった。共に結成を強力に支持してくださった。即ち丹国氏は自ら団長に横須賀氏は副団長に就任された。

⑬



⑭



⑮



⑯



⑰



⑬ 15 文字以内
⑭
⑮
⑯
⑰